

明るい気持ちで未来を思い描く時や

深い悲しみに包まれた時

なぜ、人は空を見上げたくなるのでしょうか。

広く高く、果てない空。

私たちの全てを受け止めてくれるかのような、空。

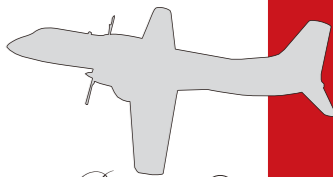
空は、いつも私たちの頭の上にあります。

ともすれば夢を失いそうになる今の時代だからこそ、

空に憧れ、勇気と努力を持って飛行機開発や操縦に挑んだ

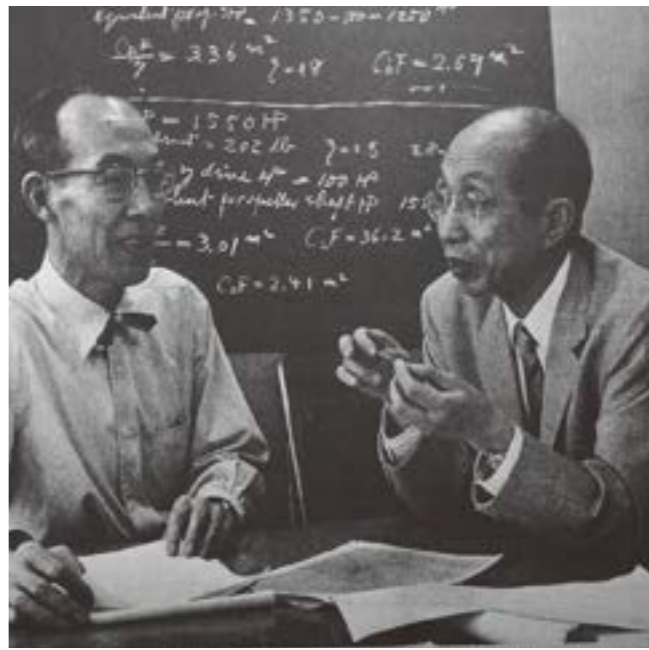
青森の先人たちを紹介します。

特集
翔べ！飛行機
～空に憧れた人びと～



Dream③

世界の空に日本の旅客機を 国産旅客機YS-11の開発に取り組む。



東京帝大時代の同級生堀越二郎（左）と話をする木村。1957（昭和32）年。

「零戦」の設計者 堀越二郎（当時・新三菱重工業）
1903～1982 群馬県出身。「零式艦上戦闘機」（零戦）の設計者として有名。新三菱重工業株式会社参与、東京大学宇宙航空研究所講師、防衛大学校教授、日本大学生産工学部教授などを歴任した。宮崎駿監督の長編アニメーション作品『風立ちぬ』の主人公のモデルともなった。



「隼」の設計者 太田稔（当時・中島飛行機）
自社で一貫生産する高い技術力を備え、東洋最大の航空機メーカーだった中島飛行機株式会社（SUBARU、日産自動車の前身）に在籍。一式戦闘機「隼」などの設計に関わった。



「飛燕」の設計者 土井武夫（当時・川崎航空機）
1904～1996 山形県出身。川崎航空機（現・川崎重工業）の要職を歴任。液冷式エンジン搭載型の三式戦「飛燕」や、空冷式に改良した「五式戦闘機」が有名。また、双発機の開発にも貢献した。

航空業界では、戦前から業界を支えた彼らを「5人のサムライ」と呼んだ。



飛行艇の第一人者 菊原静男（当時・川西航空機）
1906～1991 兵庫県出身。川西航空機（現・新明和工業）で、九七式飛行艇、実験機 UF-XS や紫電改などの設計に従事。二式飛行艇では主任設計者となり、欧米の飛行艇を大きく上回る性能を実現した。



「YS-11」。

財団法人輸送機設計研究協会と日本航空機製造株式会社

財団法人輸送機設計研究協会では、YS-11を開発するための基礎研究と基本設計を開始し、これを引き継ぐかたちで設立されたのが日本航空機製造株式会社。この会社には、政府のほか、航空機関連メーカー、商社、金融機関など約200社の民間企業が出資した。

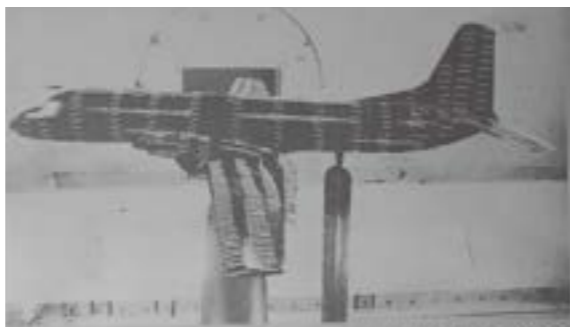


「木村秀政ホール」に展示されている「YS-11」の模型。

YS-11（わいえす-いちいち） 機名の由来は？

機名のYSは同協会の「輸送機」と「設計」のローマ字の頭文字をそれぞれとったもの、続く11の数字はエンジンと機体の設計で、それぞれ1番目の案を採用したことからつけられた。

でき上がった外形は、素人目にはごく平凡で、とりたてて従来の飛行機と変わった点はほとんどなかった。（中略）このため、新聞紙上で、フレンドシップの亜流だとか、新味が全くないとか批評された。しかし、もともとローカル線で使うという地味な目的で設計された飛行機が、コンコルドみたいな奇抜な形になるはずがないのである。毎度のことながら、実情を理解しない無責任な批評には腹がたった。（『木村秀政 わがヒコキ人生』より）



模型による風洞実験。

目指します。そして、できるだけ多くの乗客を運ぶことのできる航空機を目標にし研究を重ねました。

輪研発足の翌年1959（昭和34）年には、輪研の活動を引き継ぐかたちで日本航空機製造株式会社が創立。いよいよ「YS-11」の本格的な設計・製造が開始されます。

4年後の1962（昭和37）年8月30日、初の純国産旅客機「YS-11」が誕生します。そして、1965（昭和40）年4月、定期運行便として日本の空を飛び始めました。

木村は後年、搭乗するたびに「自分の子供に対するような愛着が湧く」と感慨を述べています。

「YS-11」は182機生産され、76機が海外に輸出されました。

輸送機設計研究協会発足 そうそうたる顔ぶれが集結

戦後10年、昭和30年代に入ると、日本の航空界では「自国の航空機技術を残したい」という気運が高まります。

「世界の空に日本の旅客機を」と、1957（昭和32）年4月に通産省と航空工業会の臨時役員会により、輸送機の基本構想をするための組織設立が決定。5月に発足したのが、財団法人輸送機設計研究協会（輪研）です。

輪研は、東京大学内に置かれ、木村は技術委員長として招聘されます。設計陣には、堀越二郎、菊原静男、太田稔、土井武夫といった、戦時中に数々の傑作機を設計した当時の最高クラスのメンバーが集められました。

こうして、初の国産旅客機「YS-11」の基本設計が1958（昭和33）年にスタートしました。

1962年8月30日 「YS-11」誕生

この時日本は高度経済成長期に入っており、近い将来、航空機の利用客が急速に増えることが予想されました。

離着陸距離をより短く、燃料消費をより少なく、広大な土地を持たない島国であり、石油などの資源の乏しい日本の風土に合った航空機を木村たちは